

初期詩篇——イクバルのウルドゥー詩 (17) ——

松村 耕光* 訳

はじめに

本稿は、公刊された詩集には収められていない、以下のイクバル初期ウルドゥー詩3篇の翻訳である。

1) 「パンジャブ・ムスリムへのイスラミーヤ・カレッジの呼びかけ (Islāmīyah College kā *khiṭāb* Panjāb kē musalmānōn sē)」

2) ガザル (初句 *Khār-e ṣaḥrā nah saḥī dasht kē patthar hī saḥī*)

3) ガザル (初句 *Tum āzmā'ō hān kō zabān sē nikāl kē*)

「パンジャブ・ムスリムへのイスラミーヤ・カレッジの呼びかけ」は、1902年2月23日、イスラーム擁護協会 (Anjuman-e Ḥimāyat-e Islām, 1884年、ラホールで設立) 第17回大会で発表された長詩である。1891年にイスラーム擁護協会が設立したイスラミーヤ・カレッジを擬人化し¹⁾、カレッジがパンジャブのムスリムにカレッジでの知識の獲得を訴えかけるという内容のこの詩は、聴衆を大いに感動させ、詩が印刷された小冊子は10ルピーで売れたという²⁾。

2) と 3) は、発表年は不明であるが、ラホールで定期的に開かれていた詩会で、まだガバメント・カレッジの学生であったイクバルが詠んで称賛されたガザルである³⁾。

これら3篇の詩はイクバルに詩人としての名声をもたらすのに重要な役割を果たした作品であるが、詩集には入れられなかった。発表当時のテキストが見つからないため、翻訳には拾遺集 *Ṣābir Kalōrvī, ed., Kulliyāt-e bāqiyāt-e sh'ir-e Iqbāl, Delhi, 2005* (KB と略す) を用いた。他の拾遺集等も参照し⁴⁾、大きな違いがあるところに関しては註記した⁵⁾。

* 大阪大学名誉教授

- 1) *Muḥammad Ḥanīf Shāhid, Iqbāl aur Anjuman-e Ḥimāyat-e Islām, Lahore, 1976* によると、イスラミーヤ・カレッジは、1891年に設立が決議され、同年に設立、翌1892年にパンジャブ大学傘下の学士課程のあるデグリー・カレッジになった (pp.36-37)。
- 2) *Muḥammad Ḥanīf Shāhid, ibid., p. 77.*
- 3) イクバルは、1895年にガバメント・カレッジに入学し、1897年に学士課程を、1899年に修士課程を修了している。
- 4) 参照した主な拾遺集等は以下の通りである。丸括弧内は本稿で使用した略号である。
Gyān Chand, ed., Ibtidā'ī kalām-e Iqbāl: ba-tartīb-e mah-o-sāl, Karachi, 1988. (IK)
Sayyid 'Abd al-Wāḥid Mu'inī & Muḥammad 'Abdullāh Qurēshī, eds., Bāqiyāt-e Iqbāl, Lahore, 1978. (BI)
Faqīr Sayyid Waḥīd al-Dīn, Rōzgār-e Faqīr, vol. 2, Lahore, 1988. (RF) 初版はラホールで1950年に出版され、1963年に増補版が出版されたようである。イクバルの言葉や逸話なども収録されている。
'Abd al-Ghaffār Shakīl, ed., Nawādir-e Iqbāl, Aligarh, 1962. (NI)
Muḥammad Bashīr al-Ḥaqq, ed., Tabarrukāt-e Iqbāl, Karachi, 1959. (TI)
Ghulām Rasūl Mihr & Ṣādiq 'Alī Dilāwarī, eds., Sarōd-e Raftah, Lahore, 1959. (SR)
- 5) 明らかに誤植と思われる箇所には言及しなかった。また、ガザルは互いに意味的に関連のない2行詩の集合体であるので、詩句順の異同に関しても註記しなかった。

パンジャブ・ムスリムへのイスラミーヤ・カレッジの呼びかけ⁶⁾

今日、建築された建物が建築した者に話しかけようとしている
 金属鏡^{かがみ}がアレキサンダー大王に話しかけようとしている⁷⁾

絵が絵師に呼びかけた

絵が創作意欲に話しかけた

朝の薫風は何と答えるのであろうか

塞がった蕾が口を開こうとしている

見るがよい、薔薇が秋の惨状^{ようす}をどのように伝えているか

薔薇^{フルフル}は夜鶯から話す力を借りてきた⁸⁾

恋はあらゆる方法で美を飾る

蛾の羽根は芯切狭となる⁹⁾

燃え上がる嘆きの焰を見るがよい

蠟燭の涙の中にもその焰の輝きがある¹⁰⁾

おお、神よ、溜息にはどれほど佳人のような魅力があったことか

溜息の「効力」は歓喜のあまり何度も己の身を捧げた¹¹⁾

突破口が開こうとしている、断食明けの人の口が開くように

私が巡らせる方策の爪は祝祭^{イード}の新月である¹²⁾

この魔術は一体誰に影響を及ぼすのであろうか

宴の蠟燭の煙は征服をもたらず^{スルマ}目薬である¹³⁾

恵みの美女シーリーンを慕うファルハードたちが宴の席に着いている

宴に乳の河が流れようとしている¹⁴⁾

6) 本翻訳に用いた KB は SR に基づいているようであるが、一部異同が見られる。KB, BI, SR では「ムスリムへの」の部分は *musalmānōn sē* であるが、IK, NI では *musalmānōn kō* となっている。ギャーン・チャンドに拠れば、この詩は「陶醉した言葉 (*Zabān-e hāl*)」という題名で、1902年3月19日、ラホール^{ラハール}の週刊新聞『鉄の爪 (*Panjah-e Faulād*)』に掲載された (IK, p. 381)。TI, RF にはこの詩は収録されていない。

7) 金属鏡はアレキサンダー大王 (イスカンダル) によって発明されたとされている。

8) 薔薇を恋い慕って嘆く夜鶯 (*bulbul*) の声を借りて薔薇は秋の到来を嘆いているということ。第1半句の「見るがよい、薔薇が秋の惨状をどのように伝えているか (*Dēkhiyē gul kis tarāh kahtā hai aḥwāl-e khizān*)」の部分は、NI, SR では「見るがよい、明日、秋の様子は何と言うのであろうか (*Dēkhiyē kal kis tarāh kahtā hai aḥwāl-e khizān*)」となっている。誤記であろう。

9) 求愛者 (恋) は佳人 (美) を美しく飾ろうとする。蠟燭 (美) に恋い焦がれる蛾 (恋) は自分の羽根を芯切狭にして蠟燭の焦げた灯心を切り、蠟燭の焰を再び燃え立たせようとする (焦げた灯心を芯切狭で切ると輝きが増す)。

10) 蠟燭の流れる蠟は涙に譬えられる。宴の蠟燭も嘆きの影響を受けているということ。

11) 心から発せられる溜息には効力がある。溜息があまりにも美しかった、すなわち心の底からの溜息であったということ。

12) 爪の付け根の新月状の白い部分を断食明けの新月に見立てている (新月が出るとラマザン月の断食が終わる)。方策という爪が突破口を開こうとしている、問題を解決しようとしているということ。

13) 「征服をもたらず目薬」目に点じた者を征服者とする魔法の目薬。「目薬」の部分はスルマ (*surmah*) と記されているが、ランプの煙の煤から作られ、美容、視力向上、邪視除け等のために目の周囲に付けられるカージャル (*kājal*) を意味していると思われる。スルマは硫化アンチモン、硫化鉛から作られる。

14) シーリーン (*Shīrīn*) はファルハード (*Farhād*) の想い人。ファルハードはシーリーンのために岩山を穿ち、彼女の宮殿まで乳の川 (白波の立つ川、或いは乳のように甘い水の川) を引いたとされている。

私は心の館から忍耐を追い出した

私は言葉の巻き毛を四方に散らしたのである¹⁵⁾

今日、私は私の痛む心について話すことにする

自分の身に起きていることをこの満席の宴で話すことにする¹⁶⁾

シナイ山という蠟燭から立ち上る煙のように私の息は乱れている

愛と忠節の魅力的な物語を物語ることにする¹⁷⁾

私の嘆き声は宴にいる誰の心を掻き乱すであろうか

失われた私の心を悼む詩を読み上げることにする

薔薇の香りが^{くちばし} 薔の中に潜んでいなければならない

そうでなければ美しい鳴き声という評判は評判倒れになってしまう¹⁸⁾

おお、傷つけられることを望む心よ、どう慰めればよいのか

ああ、この視線の矢は外れないと言われていたのだが¹⁹⁾

言うべきことは多いが言えることは限られている

言おうとしていることを察して欲しい

歓びの宴で私は一体誰を待っているのでしょうか

足音がするとあの人の足音だと言ってしまうのである

隊商が目的地に向かって出発しようとしている

ペンの走る音がすると私は鈴の音がすると言ってしまうのである²⁰⁾

おお、恵みの手よ、おまえは真珠を与えようとしている

おまえを恵みの雲、恩恵の大海と呼びたいと思う

口から洩れ出てもよいが

おお、言葉よ、しばし待て、私は今、自分で言おうとしている

イエスの奇跡を再び私は行った

私はペンによって命無きものに話す力を与えた²¹⁾

君たちが雨雲となってこの花園に真珠の雨を降らせるとき

草原の運命は目が開くように目覚める²²⁾

私は貝、君たちは春の雨雲、私は薔薇園、君たちは春

新緑の草原に君たちは惜しみなく雨を降らせる²³⁾

15) この詩句はベルシア語。黙っているのをやめ、言いたいことを言ったということ。

16) 「この満席の宴」この詩が詠まれたイスラーム擁護協会年次大会の会場。

17) 「シナイ山という蠟燭から立ち上る煙(dūd-e sham‘-e Tūr)」シナイ山に神の光が出現し、山が焰に包まれたという物語に基づき、シナイ山を蠟燭に見立てている。

18) 「^{くちばし} 薔」嘴を薔に見立てている。

19) 想い人の眼差しの矢に射抜かれたいという望みが叶わないということ。

20) 「鈴の音」駱駝が歩き出すときに首に掛けられた鈴が発する音。出発の合図ということ。

21) イエスは死者に息を吹きかけて蘇らせたとされている。「ペンによって」とは、詩(言葉)の力でということ。「命無きもの」はイスラミーヤ・カレッジを指す。この詩句はベルシア語。

22) 「君たち」パンジャブのムスリム。第2半句の「目が開くように」の部分は直訳すると「目覚めた眼のように(mithāl-e didah-e bēdār)」であるが、IKでは「目覚めた約束のように(mithāl-e wa‘dah-e bēdār)」、NIでは「逢瀬の(ときの)眼のように(mithāl-e didah-e didār)」となっている。

23) ウルドゥー詩では春の雨滴が貝の中で真珠になるとされている。

私は文字をご存知なかったヤスリブの御方のご教示によって生み出された
 君たちはこの御方が作られた共同体の旗手である²⁴⁾
 私は学問の大空に懸かる新月である
 君たちは新月の軍隊の指揮官である
 私は学問の国の継承者である
 君たちは嘗ての援助者^{アンサール}のような存在である²⁵⁾
 ここは決して秋風の色には染まらない
 私はムスリムの薔薇園、君たちはそれを囲む防壁である
 君たちが望めば、この薔薇園の運命は変わる
 蕾一つひとつが開花し、佳人のターバン飾りとなる
 君たちは七つの国から選ばれた国に住んでいる
 この薔薇園の香りはタタールの地と対抗できないであろうか²⁶⁾
 恩恵という霊薬が私の壁に触れると
 私の土は王者の真珠のようになるであろう
 購買意欲よ、今こそ買い時である、さもないと
 エジプトの市場から美しいヨセフが消えてしまうであろう²⁷⁾
 私は学問のヨセフであり、パンジャープは私のカナーンである
 学問の朝の息吹によって私の裾は引き裂かれるのである²⁸⁾

 私には嘆いている者を快活にする^{ちから}魔力がある
 私は我が共同体の落伍者たちを復帰させることができる²⁹⁾
 おお、待ち望む目よ、私はおまえにとって祝祭である
 私は佳人^{あひのひと}の顔からパールを取り去ることができる
 おお、猟師よ、私はこの世の花園に棲む学問の鳥である
 もしおまえが黄金の網を作れば、私はその中に入るであろう
 トゥूसイー、ラーズイー、スィーナール、ガザーリー、ザヒール……
 ああ、私はあの美しい絵巻を再び見せることができる³⁰⁾
 エジプト、トルコ、シリアから蛾を飛んで来させるような火——
 私はパンジャープにそのような蠟燭の火を灯すことができる

24) 「文字をご存知なかったヤスリブの御方」ムハンマドのこと。ムハンマドは知識獲得を重視していたとされる。ヤスリブ (Yathrib) はメディナのこと。

25) 「援助者 (ansār)」迫害され、メッカから移ってきたムスリムを援助したメディナのムスリム。

26) 「七つの国から」全世界からということ。
 「タタールの地」中央アジアでは良質の麝香が得られる。

27) ヨセフ (ユースフ) はエジプトの市場で奴隷として売られた。

28) ヨセフ (ユースフ) はカナーン出身。奴隷ヨセフを愛した女主人ズライハーがヨセフの衣の裾を引き裂いた物語に因んでいる。「私」(イスラーミーヤ・カレヅジ) は学問に愛されていると言いたいのであろう。この詩句はベルシア語。

29) 第1半句の「嘆いている者を快活にする (rōtōn kō hansā saktā hūn)」の部分、IK では「魂を作ることができる (rūhōn kō banā saktā hūn)」。

30) 「トゥूसイー、ラーズイー、スィーナール、ガザーリー、ザヒール」トゥूसイー (Tūsī, d. 1067) は、十二イマーム派の学者、ラーズイー (Rāzī, d. 925/932) とスィーナール (Ibn Sīnā, d. 1037) は医学者・哲学者、ガザーリー (Abū Hāmid Ghazālī, d. 1111) は法学者、思想家、ザヒール (Zahīr Fāryābī, d. 1201/1202) はベルシア語詩人。NI ではガザーリーとザヒールの順序が逆になっている。

私に奇跡を起こす力があるかどうか試してみるがよい
眼まなこが探し求めているものを私は見せることができる
西洋が耳を傾けていた音楽——
その音楽を私は再びこの世界に聞かせることができる
グラナダやバグダードが嘗て自慢していた宴——
私はその宴を再び世界に見せることができる
日の出の場所も恥じ入るほど家を輝かせる真珠——
そのように素晴らしい真珠を私は分け与えることができる
もし隊商の者たちが私を志の道のヒズルであると思うなら
私は目的地に至る道を教えることができる³¹⁾
私は学問の酒甕から澄んだ酒を取り出した
バンジャープの大地に祝福あれ³²⁾

薔薇園の裾は物乞いの手となっているのか
真珠を撒き散らす雲が薔薇園を覆っているのか³³⁾
おお、神よ、私は望んでいる——風が吹くことを、そして薔薇園が沸き立つことを
棘によって、薔薇の蕾によって、嘴のような蕾によって³⁴⁾
美自身が自分を見てくれる眼まなこを求めている
最早世界には逢瀬を求める者がいなくなってしまうのであろうか
花園を散策するために多くの人がやって来た
庭師は花園の刺草いらくさを外に抜き捨てないであらうか
この世に私の命があるのは君たちのお陰である
私の息の糸を長く伸ばしているのは君たちの恵みの手ではないのか³⁵⁾
壁は昴の高みにまで達しなければならない
とするなら、煉瓦を2、3個積み上げたところでどうなろうか
昔は剣の時代であったが今はペンの時代である
この木の剣は征服者となったのである
学問のヨセフが当地バンジャープに現れたのは僥倖である
バンジャープやバンジャープの市場にそのような価値があったであらうか
バンジャープの名誉は私に結びついているのではないのか
敵の非難は矢のようではないか
秘めた思いを口にするのは難しいことであらうか
おお、話すためにある口よ、沈黙に何の用があらうか
私は哀れな者たちの声に耳を傾け

31) 「ヒズル (Khizr)」伝説上の人物。道に迷った者を助けに現れると言われている。NIでは第1半句の「志の道のヒズル (Khizr-e rah-e himmat)」の部分が「榮譽の道のヒズル (Khizr-e rah-e 'izzat)」となっている。

32) この詩句はほぼペルシア語。

33) 裾を広げて恩恵を受けようとしているのかということ。

34) 第1半句の kuchh hawā aisī chālē yā rabb keh gulshan-khēz hō の句末の単数形の動詞 hō が IK, NI, SR では複数形の hōin になっている (意味は変わらない)。

35) 私の命は君たちの手中にあるということ。

櫛をその乱れた髪に入れた³⁶⁾

胸の焔のために口は狂おしく動かないであろうか
 語るための宴ぼしよを口は探し出したのである
 この満場の宴で心の秘密を語ることにする
フルフル夜鶯の嘆きには薔薇園が相応しい³⁷⁾
 「忍耐」は非難するが、暴露することには大きな喜びがある
 秘密を持つ者は苦勞する
 努力によって繁栄を得た者は
 銀河の額を飾る星である
 庭師もいれば、獵師もいる——
 巢は一つなのに多くの困難がある³⁸⁾
 もし勇氣というヒズルが旅路の同伴者であれば
 薔薇園は君たちのものとなり、君たちは薔薇園のものとなる
 世界を飾るような人生が必要である
 世界という宴の明るく輝く蠟燭となるがよい
 井戸は喉の乾いた者の許に自ら来るであろうか
 目的地は隊商の許に自ら来てくれたであろうか
 世界という薔薇園で美しい光景を探さなければならない
 眠ることができない程素晴らしい光景を
 それは不休の努力の中にある
 君たちは何処に行くのか、何処に心の安らぎを求めているのか
 私の寝所は学問の月光によって明るく輝く
 私の裾にはムスリムが失った真珠がある³⁹⁾

 さあ、勇氣の血潮を沸き立たせるがよい
 友愛の成果を世界に知らしめるがよい
 深い同情には信仰の富が潜んでいる
 最良の時代の光景を再び世界に見せるがよい
 挫折の風のせいで願望の巻き毛が乱れてしまった
 恵みの手の櫛で乱れた巻き毛を整えるがよい
 どの薔薇の蕾も歓迎してくれている
 この花園にそよ風のように現れるがよい
 この薔薇や薔薇園は文字をご存知なかったヤスリブの御方からの贈り物である
 おお、庭師よ、花が萎れてしまわないように気を付けよ
 激しく嘆く声が秘められた想いにこう教えた

36) この詩句はペルシア語。

37) 夜鶯フルフルは薔薇を恋慕して鳴くとされている。

38) 「巢」フルフル夜鶯の巢。庭師が巢のある枝を切ったり、獵師が夜鶯フルフルを捕らえたりする危険性があるということ。

39) この詩句はペルシア語。

「私のように口をついて出てくるがよい」
恵みを求める者が恵み深い心にごう言葉巧みに囁いた
「求愛者の心が愛しい人の許に行ってしまうように私の許に来て欲しい」
パンジャープ
五大河地方に六番目の大河が流れようとしている
雨雲のように湧きあがり——湧きあがって雨を降らせるがよい⁴⁰⁾
機敏な手が引き留めようと待ち構えている
この宴から出られる者などいるであろうか
宗教だけでなく、この世界のことに思いを馳せるべきである
敵は多い——どの敵にも騙されたりしないように⁴¹⁾
自分はムスリムであると言いながら、私には無関心——
そのような者たちの数珠は異教徒の紐^{しるし}以外の何物でもない⁴²⁾

私は望む——学問に愛された者がこの館を明るく照らすことを
この宴が佳人の宴のようになることを⁴³⁾
そうなればここは嘗てのグラナダやバグダードのようになるであろう
忘れられた物語が思い出されるであろう
宴に学問の酒を求める心が生まれた
酒は分けられることになる——しかし、まず盃の手配をしなければならない⁴⁴⁾
このニザーミーヤ学院が存続すれば、多くのサアディーが生まれるであろう
しかし、まず自分の家を昔のように輝かせなければならない⁴⁵⁾
君たちはインドやアンダルシアを征服した者たちの子孫である
王の輝きには及ばないとしても、首長の輝きを持ちたいと私は願っている
この世で虐げられるのは学問を捨てた報いである
花園とは無縁の雑草になってみるがよい⁴⁶⁾
裕福な者は学問の富も授ける
しかし、まず君たちの態度は托鉢者^{フアキール}のような態度でなければならない⁴⁷⁾
この狂気は目を開かせてくれる
世界を飾るこの美に狂うがよい⁴⁸⁾
世界を手なずけるのは君たちの仕事である
君たちの人生は魅力的なものでなければならない

40) パンジャープには五つの大河がある。

41) 第2半句の「どの敵にも騙されたりしないように (kahīn dhōkā nah dē jā'ē kō'ī)」の部分 (直訳すると、「誰も騙されたりしないように」)は、IKでは「誰も騙されたりしないように (kahīn dhōkā nah khā jā'ē kō'ī)」となっている。

42) 「数珠」はムスリムの象徴。非ムスリムは非ムスリムのしるしとして紐を身に付けていた。この詩句はペルシア語。

43) 「佳人の宴」賑やかな宴。

44) 酒 (知識) を分配するには盃 (イスラミーヤ・カレッジ) が必要ということ。

45) 「このニザーミーヤ学院」イスラミーヤ・カレッジを指す。ニザーミーヤ学院はセルジューク朝の宰相ニザームル・ムルク (Nizām al-Mulūk d. 1092) が設立した教育機関。ペルシア語詩人サアディー (Sa'dī d. 1291/1292) はこの学院で学んだ。
「自分の家」自分の国、社会ということ。

46) 知識の花園から遠ざかってみるがよい、雑草のように踏みつぶされるからということ。

47) 第2半句の「まず、君たちの態度 (pahlē ravish tērī)」の部分は、NIでは「君たちの最初の態度 (pahlī ravish tērī)」となっている。BIにはこの詩句は含まれていない。

48) 知識欲、向学心という狂気。

学問の火に燃えて死ぬのは難しいことではない
 まず自分の心に蛾の光を生み出さなければならない⁴⁹⁾
 おお、「たとえ中国にでも知識を求めて行くがよい」とおっしゃった御方よ
 あなたは叡智の真珠を共同体の命の糸に通して下さった⁵⁰⁾

 恋の秘密を人々の心に分かりやすく示された御方よ
 あなたは人々の胸をそのお姿で輝かせ、ヨセフの国とされた⁵¹⁾
 その足跡から数多のシナイの山を生み出された御方よ
 あなたはヤスリブの大地を叡智顕現の場とされた
 アラブという語を構成する文字アインによってそのご本性が隠されている御方よ
 あなたはご尊顔を文字ミームのパールでお隠しになった⁵²⁾
 去られたあとの「預言」を虚偽とされた御方よ
 あなたは宴を信仰の蠟燭の光でお照らしになった⁵³⁾
 神と同じ名をお持ちになる御方よ、あなたは知識の国の門である
 あなたは文字をご存じではなかったが、叡智をお示しになった⁵⁴⁾
 あなたは愛の火を一神教の裾で煽ってお付けになった
 世界は鏡のように驚いた⁵⁵⁾
 あなたのお陰でアラビアの砂漠は注目の的となった
 この荒れ果てた大地は薔薇が溢れる場所となった
 あなたの光があれば心は嘆かない
 あなたが木からお離れになったとき、その乾燥した木ですら涙に濡れた⁵⁶⁾
 大海に薔薇の花を送ることは大海に良い結果をもたらす
 あなたは取るに足らない水滴に嵐に対抗できる力をお与えになった⁵⁷⁾
 行動しない者にあなたは「神のお慈悲への望みを捨てるな……」をお教えになった
 すべての人にあなたは学び舎の門をお開きになった⁵⁸⁾
 我々の信仰の礎である御方よ、我々のために祈り給え
 我々の裾が叡智の真珠で満ち溢れるようにと

49) 「蛾の光」 蠟燭の焰を恋い慕う蛾の恋の焰が放つ光。知識を求める気持ちということ。

50) 「たとえ中国にでも知識を求めて行くがよい」 ムハンマドの言葉とされている。この詩句はペルシア語。

51) 「ヨセフの国」 美しく、清純な場所ということではないかと思われる。ヨセフ(ユースフ)は美男の預言者。最終連の詩句はすべてペルシア語。

52) アラブ('arab)という語はアラビア文字アイン、レー(ラー)、ペー(パー)で構成される。文字アインを除くと、残りの二文字でラッブ(rabb)「主=神」という単語になる。ムハンマドの別名アフマド(Ahmad)は、アラビア文字アリフ、ヘー(ハー)、ミーム、ダールで構成されるが、文字ミームを除くと、「唯一者=神」を意味するアハド(ahad)という語になる。

53) ムハンマドの預言で預言は完結したとされている。第2半句の「信仰の蠟燭の光(nūr-e sham'-e tīmān)」の部分、IK, BI, SR では「叡智の蠟燭の光(nūr-e sham'-e 'irfān)」となっている。

54) 「神と同じ名をお持ちになる御方」第4代カリフ、アリーのこと。アリーは「高貴なる者」という意味の神の属性名の一つ。
「あなたは知識の国の門である」アリーを指している。「私は知識の街であり、アリーはその街の門である」とムハンマドが述べたというハディースに基づく。

55) 「鏡のように」 驚き、見開かれて静止した目は鏡に譬えられる。

56) ムハンマドは棗椰子の木の傍で説教していたが、説教壇ができると説教壇で説教するようになった。ムハンマドが来なくなり、その棗椰子の木は大いに嘆いたという。

57) 第2半句の「水滴(qatrah)」の部分、IK では「危険(khatrah)」。

58) 「神のお慈悲への望みを捨てるな……」 コーラン、集団の章、第53節。

ガザル (I)⁵⁹⁾

砂漠の棘がなければ荒野の石でも構わない
足の肉刺が潰れないのであればそれはそれで構わない⁶⁰⁾
説教師よ、食べ物心配は無用
食べる物がなければ、私の頭を食べても構わない⁶¹⁾
最後の審判の日に酒飲みが酔っ払ってこう言った
「紅の酒がないならカウサルの水でも構わない」⁶²⁾
終末の日、狂った私の手がこう言う
「何処に行こうか、終末の日の裾でも構わない」⁶³⁾
いいことを思いついた——網の中で暴れよう
花園にいられないなら、羽根だけでも残して行こう⁶⁴⁾
眉の刀がないなら、頸の血管を切るのは
睫毛の鋭利な小刀でも構わない⁶⁵⁾
虚無の道を歩くのは難しいと人は言う
生きているうちにもう歩いたが、死んでからまた歩いても構わない
騒がしい最後の審判の日に誰が私のことなど気に留めようか
私の記録は罪まみれだが、それはそれで構わない⁶⁶⁾
「あなたは異教徒だ」と言うとなりの人はこう答える
「あなたはイスラームを大事にすればいい、私は異教徒で構わない」
「あなたはひどい人だ」と言うとなりの人はこう言う
「ひどい人だと言うならそれはそれで構わない」
私^{イクバル}には詩は作れない
私を詩人だと言うなら詩人と言われても構わない

59) KBは11詩句、IK、BIは10詩句、RFは8詩句、SRは2詩句を取録(RFはSRに収録された2詩句以外の詩句を取録)。NI、TIにはこのガザルは収録されていない。

60) 「砂漠の棘」砂漠に生えている木の棘。恋に狂った求愛者は裸足で砂漠や荒野を彷徨い歩く。足の肉刺が潰れるほど彷徨いたいと思うが、それが叶わなくても仕方がないということ。

61) 悩ませるという意味のウルドゥー語の慣用表現「頭を食べる」に基づいている。KBのみこの詩句を取録している。

62) 「カウサル(Kauthar)」天国にある川の名。

63) 恋の狂人は苦しみのあまり上着を引き裂いてしまう。最後の審判が行われたら、その審判の場を引き裂こうということ(「終末の日の裾」は審判の行われる場を指している)。IKでは「狂気の手(dast-e junūn)」が「狂気の荒野(dasht-e junūn)」となっている。「手」の方が良いであろう。

64) 獵師に捕まるのであれば、せめて羽根だけでも愛する薔薇のある花園に残していきたいと夜鶯が言っている。この詩句は詩会の参加者に称賛され、次回の詩会にも是非参加して欲しいと要請されたという(Muḥammad Ḥanif Shāhid, *op. cit.*, p. 66)。IK、BI、SRでは、第1半句は以下のようにになっている。
獵師よ、網の中で暴れさせてはくれまいか

65) 佳人の眼差しの魅力に悩殺されたいと思っている。

66) 人間の言動は両肩にいる天使によって記録されており、最後の審判の日に記録簿が神に提出されるとされている。

ガザル (2)⁶⁷⁾

「いいですよ」と自分の口に言わせてみるとよい
 その言葉も逢瀬を求める私に身を捧げてくれるだろう⁶⁸⁾
 真珠と見做して情け深い神が手に取ってくださった
 私が流した冷や汗の滴を⁶⁹⁾
 心を買おうとする者の魔力ある眼差し
 商品とともに売り手も買われてしまうのだ
 或る佳人のドーパッターが歩いているときにずれてしまった
 羞恥心がこう言った——「ご主人様、きちんと着けて下さいよ」
 忍耐よ、気を付けよ、私の望みが
 口から出たりしないよう
 天は私に狙いを定めて放った
 新月の弓から放たれた矢が外れたりしようか⁷⁰⁾
 妖艶な歩き方をして恥知らずと思われたりしなければよいのだが
 あの佳人はドーパッターをきちんと着けずに歩くのだ⁷¹⁾
 私は言った——「口がないのに私の悪口を言うなんて」
 あの佳人が言った——「あなたこそ口の利き方には気を付けて」⁷²⁾
 あの佳人は驚いている、私は死んで神様に逢いたいと言っているのに……
 「逢いたい」の意味を勘違いしたのだ⁷³⁾
 私は悲嘆でもなければ、願望でもない
 私を追い払いたいなら、手はずをしっかりと整えるがよい⁷⁴⁾
 ああ、「否」にはいくつもの形がある
 逢瀬を求めるといくつもの回答がある
 あの佳人が笑って言う——「さあ、行って。話しかけないで」
 その嫌がり方が気に入った
 狂気の荒野でヒズルが私に言う——「先に行くがよい
 足の棘を抜いてから追いつくよ」

67) KB, IK, BI は 16 詩句収録。RF には、このガザルは 1896 年の詩会で詠まれたと記されており、3 詩句 (KB の第 3、第 4、第 10 詩句) が掲載されている。NI は 13 詩句収録。TI には 5 詩句がラクナウの雑誌『眼差しの矢 (*Khadang-e Nazar*)』1902 年 5 月号から採られている。SR は 13 詩句収録。SR には「1897 年の詩会のガザル」という記載と詩会を運営していた組織の雑誌『終末の日の騒乱 (*Shōr-e Maḥshar*)』1896 年 12 月号への言及がある。

68) 「いいですよ」というあなたの言葉も私の味方をしてくれるだろうということ。

69) この詩句は詩会で絶賛された (Muhammad Hanif Shāhid, ed., *op. cit.*, p. 66)。第 2 半句 *Qatrē jō thē merē 'arq-e infī'āl kē* は直訳すると「その滴は私の冷や汗 (の滴) だった」であるが、元々は、*Qatrē girē thē jō 'arq-e infī'āl kē* 「冷や汗の滴が流れ落ちたとき」であったものが誤って人口に膾炙しているという記述があるが (RF2, pp. 329–330)、当時の資料が入手できないので確認できない。*'arq-e infī'āl* 「冷や汗」は羞恥、悔悟のあまり流す汗。「現世でどのような善行を行ったのか」と最後の審判で神に聞かれ、冷や汗を流したところ、その滴を神は真珠のように扱ってくださった (現世での行いを赦して下さった) ということ。

70) 佳人の眉を新月に譬えている。

71) 「ドーパッター (*dōpattāh*)」女性が首に巻いたり、頭に被ったりする細長い布。

72) 佳人の口は非常に小さく、目に見えないとされている。

73) 「逢瀬 (*waṣl*)」には、神に会うこと (死ぬこと)、想い人に会うことという二つの意味がある。

74) 私を追い出すのは、悲嘆や願望を心から消し去るより難しいということ。

あの佳人^{ひと}の家の前で騒ぎがもう起きたりしないよう
衰弱よ、私をゆっくり倒すのだ
「あなたの肖像画が欲しい」と言うとあの佳人^{ひと}は笑ってこう答えた
「あなたは絵では表現できないような佳人^{ひと}に恋したのではなかったかしら？」
イクバルよ、私はラクナウーにもデリーにも関心がない
私が捕らわれているのは絶世の美女の巻き毛なのだ⁷⁵⁾

75) イクバルが参加した詩会ではデリー派の詩人とラクナウー派の詩人のグループとが対立していた (Ahmad Din, *Iqbāl*, Karachi, 1979, pp. 110–111)。